

RGB かごしま 趣意書

およそ1世紀にわたり増加の一途をたどった我が国の人口が、ついに減少に転じた。日本の総人口は平成27年の国勢調査人口速報集計（平成28年2月28日）によると、1億2711万人で、前回（平成22年）から94万7千人（0.7%）、年平均18万9千人（0.15%）減り、大正9年の調査開始以来、初めての減少となった。

さらに、今後10年間で、日本の人口は700万人減少し、15~64歳の生産年齢人口が7000万人まで落ち込む一方で、65歳以上の人口は3500万人を突破する。10年後の日本は、団塊の世代が75歳を超えていわゆる後期高齢者となり、国民の3人に1人が65歳以上、5人に1人が75歳以上という、未曾有の「超高齢社会」を迎える。

一極集中が進む東京の人口でさえ、オリンピック開催後の平成32年には減少に転じると予想され、人口の流出、過疎化に歯止めのかからない鹿児島をはじめとする地方においては「人口減少社会」「消滅可能性都市」といったキーワードは、もはやその可能性を論じる時期をとうに過ぎ、まさに喫緊の課題として向き合う事象である。

生産年齢人口の減少、すなわち労働力の減少を深刻化させないために、より多くの人々が働く必要がある。女性の積極的な社会参画はもとより、働く意志がありながら、何らかの制約で躊躇している女性・高齢者が働ける環境の整備が必要だ。そのためには様々な障壁や境界、あらゆる垣根をなくした「ボーダレス」社会の実現が求められる。

我が国が人口減少社会となり、縮小していく一方で「外国」は巷に溢れている。著名な観光地や家電量販店は席卷の表現をもって形容する他ない盛況ぶりであるし、他国発のニュースに邦人の消息が含有されるのも茶飯事である。「グローバル」はもはや他人事ではない。日本が縮小するのであれば、伸びしろを探す場所は「グローバル」以外にはない。

鹿児島工業高等専門学校は、鹿児島県霧島市に立地する高等教育機関である。高等専門学校の使命は取りも直さず優秀な人材の輩出であるが、高等教育機関であることのもう一方の立脚点は研究である。高専における「リサーチ」すなわち研究力は、「グローバル」への対応が不可避であればこそ、地方から世界へ向けて発信する知（地）の力に他ならない。

高専の持つ既存の研究力「リサーチ」をさらに昇華させ、「グローバル」の意義とその多様性を考える。様々な課題にアプローチする上で、男女共同参画をはじめとする境界を超えた力「ボーダレス」を推進エンジンに、高専の訴求力と「無限の創造性」を高めることを目的に、鹿児島高専では平成29年5月に「RGB かごしま」(**International Forum on Research, Global and Borderless Activities in Kagoshima**)を開催する。

RGBはまた、光の三原色でもある。平成26年、赤崎・天野・中村の日本人科学者らがノーベル物理学賞に輝いたことはまだ記憶に新しい。彼らの受賞は青色発光ダイオードの発明によるものであり、Red・Green・Blue、わずかこの3色であらゆる光が再現できることがもたらす可能性は無限大である。Research・Global・Borderless、この三つのキーワードが、縮小を続ける日本の未来を明るく照らし、暖かく包み込むようなあらゆる光の素となることを目指して、このフォーラム開催の趣旨とする。